

令和4年度 校内研究反省

小田原市立三の丸小学校

成果

先生方の反省を見ると、

- ・教科の特性に応じた、子どもの知的好奇心と思考を大切に、単元構想を作り努力ができたか。
(よくできた、できた…78.3%)
- ・実際の授業での「子どもが解決したい問題」は、「事実に基づく問題」「多様な、あるいは異質な考えや立場に出会う、知ることができる問題」の条件を満たしていると考えて設定しましたか。
(よくできた、できた…91.3%)

という結果であった。以上の結果から、単元構想を作成することにより、学習の道筋が子どもの思考に沿ったものとなり、「本時の問題」が子どもにとってより解決したい誠実な問題になったと考える。単元構想づくりは、三の丸小学校の校内研究の大きな柱の一つであり、本校の先生方に定着していると考えてよい。

①単元構想づくりについての研修会

単元構想づくりは、慣れるまでに時間がかかる。特に、赴任したばかりの先生にとっては、難しく感じるものであると思う。そこで、毎年、年度当初に単元構想づくりの研修会を行っている。この研修会では、形式だけではなく、何を大切に単元構想をつくるのか「研究の考え方」を確認する大切な場となっている。この機会があるからこそ、三の丸小学校の研究の考え方を継続することができていると考える。今後も、単元構想づくりについての研修会を行っていきたい。

②みんなでつくる単元構想

今年度も一人一回の研究授業を行った。研究授業は、「全体研・ブロック研・学年研」という3つのカテゴリーに分けて実施した。しかし、学年研の研究授業であっても進んでブロックの先生方に声をかけ、多くの先生方と共に単元構想・授業づくりに取り組むことができた。単元構想づくりに関わる先生が多ければ多いほど、「単元の導入をどうするか」「子どもからこんな反応があるのではないかなどアイデアが出やすく、子どもの思いや願いに沿った単元構想に近づくと考える。

③子どもの顔を思い浮かべながら語る教師集団

単元構想の検討では、「あの子なら、このクラスの子どもならどう考えるだろう。」と子ども達の顔を思い浮かべながら、子どもの思考に寄り添った単元構想づくりに取り組むことが先生方の中に定着している。そのため、「本時の学習問題が子どもが解決したい問題になっていた」と感じる先生が多かった。また、子どものつぶやきやノートの記述を丁寧に取り上げ、単元構想を0次案からn次案へ積極的に書き換えていこうとすることができた。その成果として、学習の中で「早くやりたい!」「みんなで考えたい!」と、授業を楽しみにする子どもの姿が見られた。

④地域教材の発掘

高学年の社会科では、子どもの実態と指導内容をふまえ、小田原の地域教材を積極的に生かすことができた。(5年生:小田原の漁業、6年生:小中学校へのエアコン設置、小田原北条氏)地域教材を扱うことにより、子どもにとって学習内容が身近に感じられ、「なぜだろう」「どうしてだろう」「みんなで考えたい」という切実感を生むことができたと考える。

課題

①「ひびき合うためのノート指導の工夫」について

昨年度と今年度の2年間、「ノート指導の工夫」を研究の重点項目としてきた。2年間の過程で、意識して指導してきたことを「ひびき合うためのノート指導の工夫」として系統的にまとめることができた。しかし、先生方の反省を見ると、ノート指導について「もう少し・できなかった・よくわからなかった」という方が約半数いた。そのため、来年度も重点項目として「ノート指導の工夫」に取り組んでいきたいと考える。

来年度に行いたいこと

- ① 学年始めの4月から丁寧にノート指導に取り組めるよう、年度末に各先生から提出してもらったノートやワークシートのコピーを見合えるようにし、4月からの指導に生かせるようにする。
- ② 研究授業で子どもが書いたノートやワークシートを資料として残していく。
- ③ 「ひびき合うためのノート指導で大切にしたいこと」の系統表をブラッシュアップする。

②「教師の出所」について **教師がしゃべりすぎない!**

三の丸小学校の先生方は、子どもの思考を丁寧にみとろうとする意識が定着している。研究授業では座席表を作成し、子ども同士の考えをどのようにひびき合わせていこうか、どの子の意見を取り上げようかなど、話し合いの流れを具体的に構想することが多い。だからこそ、子どもたちの話し合いに教師が介入したくなり、結果として教師がしゃべりすぎてしまうことがある。子どもの反応を待ち、少し離れたところで見守るような教師の構えも身につけていきたい。そのためには、考えのズレに気付かせたり、考えを深めたりするための「問い返し」を教師が用意しておく必要がある。さらに、高学年では、それぞれの考えの違いやズレに子どもたち自身が気付き、「でもさ～」と子どもたち自身が仲間に問いかけることができる力を育てていきたい。